文芸社　16) 昭38 二宮慎治『花作りを始める人のために』池田書店　17) 昭38 田島豊明『花いっぱい四季の家庭園芸』協文社出版　18) 昭38 主婦の友社『園芸全書』　19) 昭39 浅山英一『新版草花園芸十二ケ月』東都書房　鶴書房　20) 昭42 浅山英一『ホームコンサルタント家庭の園芸』小学館　21) 昭42 合田弘一『わが家の花づくり』鶴書房　22) 昭42 大山玲瓏『わが家の園芸』鶴書房　23) 昭42 志佐誠『園芸家のための花作りの科学』誠文堂新光社　24) 昭43 穂坂八郎『日曜花作りハンドブック』池田書店　25) 昭43 川上幸男『趣味の草花園芸』日本文芸社　26) 昭44 川上幸男『四季の家庭園芸』有紀書房　27) 昭44 伊藤義治『やさしい花木園芸』有紀書房　28) 昭44 柳宗民『花物園芸入門』池田書店　29) 昭44 柳宗民『マイホーム園芸』れもん社　30) 昭44 二宮慎治『花づくり全科』家の光協会　31) 昭44 江尻光一他『家庭園芸』地球出版　32) 昭45 鶴島久男『四季の花壇づくり―花のある暮らしのために』　33) 昭45 平城好明『家庭園芸』土屋書店　34) 昭45 上野道夫『趣味の花づくり四季の家庭園芸』新星出版社　35) 昭46 主婦と生活社『家庭園芸全書』　36) 昭50 江尻光一『園芸タブー集325』講談社　37) 昭52 平城好明『草花の愛し方　ビューティフルな園芸集』主婦と生活社　38) 昭52 北海道新聞社『増補改訂版北海道の庭づくり花づくり』　39) 昭53 岡田正順監修『図解草花園芸の事典』東洋出版(株)　40) 昭54 岡田正順監修『図解樹木園芸の事典』東洋出版(株)　41) 昭55 荒井道夫『庭で育てる北海道の草花』(株)北海タイムス社　42) 昭56 石川格『図解庭木花木の手入れ12ケ月』　43) 昭55 熊本日日新聞社『熊本の花づくり』　44) 昭57 松尾英輔『アマチュア園芸論身　45) 昭61 石川格『常識破りの園芸法』講談社　46) 昭62 柳宗民『せまくてもわが家は花園』筑摩書房　47) 平1 豊田英次『庭師の知恵袋』講談社　48) 平4 阿嘉良弘『絵で見る沖縄の花作り』沖縄出版　49) 平4 国重正昭・船越亮二『庭木・花木』NHK 趣味の園芸・新園芸相談シリーズ②　50) 平4 西良祐『草花＆花壇』NHK 趣味の園芸・新園芸相談シリーズ⑥　51) 平5 箕輪悦子『園芸マドリガル　マイグリーンライフ』ブックガーデン出版　52) 平5 子どもの遊びと手の労働研究会編『植物を育てよう竹でつくろう』ミネルウァ書房　53) 平6 花作り手帖編集部『ハーブの鉢作り・庭作り』誠文堂新光社　54) 平7 中尾真理『イギリス流園芸入門』晶文社

6) 『昭和文学全集1～35』(小学館) の中で小説の類を対象とする。なお，引用の頭の番号は集の番号を表す。

7) もっとも，そもそもシャベル自体もショベルに比べて俗語的な言い方であったことが，昭和16年の資料によって指摘されている。
○スペード　これはショウベル（俗にシャベル）に似た西洋の鋤で [4]（資料4）

8) 以上の他，小型のスコップ（第一例）かと思われる例もあるが，大型のスコップ（第二例）と併用しているために確証がない。
• スコップで周囲の土をゆるめ，球根を傷つけたり，首を折らないように，そっと掘り上げます [56](平4資料50)
• スコップなどで天地返しをし，表面の土と底の土を入れ替えます [148](平4資料50)

9) この例は絵図によってシャベルが小なるものであることがわかる。

10) 用具の説明も含めれば，両方を使う場合も若干見られる。川上幸男氏は用具説明の時はシャベル（一部例外あり）本文ではスコップを用い，浅山英一氏はその逆である。

ではあっても使用語彙ではなくなる，もしくは片方が別の意味領域を持つことばとして認識する（例えば用具B）に至るのではなかろうか。

従って，個人個人によってその把握の仕方がさまざまで，現在のような混乱を生み出しているといえよう。国語辞書の記述は昭和40年代後半まであったような一般的使用法に基づいて書かれているように思われる。が，一般社会ではかなり混乱しているのが現実である。また，このような状況を国語辞書に反映するのはむずかしいであろう。しかしながらこのような混乱の実態は日常生活に何ら影響を及ぼすことはないのだろうか。たとえば，「少年AはBをスコップでなぐった。が，決してけがをさせるつもりはなかった。」という場合，このスコップが大型のものか，移植鏝なみの小型のものかによって「けがをさせるつもりはなかった」かどうか一つの問題になるはずだ。その場合は新聞はどのように記述するのか。また，読者はどのように判断するのか。少なからず，日常生活にもシャベルとスコップの混用は影響があるのではなかろうか。

注

1) ただし、当時の資料は戦災によって焼失してしまったとのことである。明治43年の同社のカタログには，「土方用シヤブル」と「石炭用スコップ」という語が見える。

2) shovelは『諳厄利亜興学小筌』（文化8年•1811）や『英和対訳袖珍辞書』（文久2年•1862）に見え，schopは『和蘭字彙』（天保4年•1833）に見える。また，『英和対訳袖珍辞書』『和蘭字彙』の和訳にはともに「大杓子」とある。（『調布日本文化』5号拙稿参照）

3) 「JIS　ショベル及びスコップ　(ｊ)JIS A 8902-1988」（日本規格協会）

4) スコップの項目は大正期の『新式辞典』（大1），『大日本国語辞典』（大4），『廣辞林（初版）』（大14）にはないが，昭和期の『平凡社大辞典』（昭9），『辞苑』（昭10）には見える。（『調布日本文化』5号拙稿参照）

5) 園芸関係の資料については以下の通り。本文中の資料番号は，以下の（　）の番号による。

1) 大15 鈴木清『草花露地園芸』裳書房　2) 昭5 野崎信夫『住宅園芸』春陽堂　3) 昭5 石井勇義『最新盆栽の仕立方』誠文社　4) 昭16 石井勇義『空地利用野菜の作り方』誠文堂新光社　5) 昭21 山口徹『種蒔•植付•施肥•収穫家庭菜園』天泉社　6) 昭22 加藤要『新鮮野菜自ら上手に作る為に』産業図書（株）　7) 昭24 穂坂八郎『園芸総説花卉園芸』地球出版　8) 昭27 朝倉書店『生活を楽しくする四季の草花』　9) 昭33 大山毅『花の作り方12ケ月（上下）』泰文館　10) 昭34 浅山英一『花木園芸十二ケ月』東都書房　11) 昭35 野崎信夫『家中で楽しむ四季の花作り』池田書店　12) 昭35 堀江聡男編『園芸百科全書』金園社　13) 昭36 川上幸男『日曜園芸』池田書店　14) 昭36 三橋一也『生活を明るくする家庭園芸』家の光協会　15) 昭37 家庭園芸研究会『小さな庭を100％活用一坪園芸』日本

ために，剣先スコップを足で踏み込んで反転するように起こし，スコップの背で土の塊をたたいて砕いていきます[300]よく腐っているたい肥があれば，スコップ一杯をばらまいて混ぜるとなおよいのです[328]（昭52北海道新聞社『増補改訂版北海道の庭づくり花づくり』）

但し，第四の資料は複数の執筆者がいるので，個人が両語を無頓着に用いている例とは言えないだろう。

また，同じ著者が複数の書物でこの両語を同様に用いる場合もあるが，これも案外少ない[10]。例えば，二宮慎治氏（資料16・30）や柳宗民氏（資料28・29・46）はもっぱらシャベルで，平城好明（資料33・37）や石川格氏（資料42・45）はもっぱらスコップである。

小説からの用例で，同一作品で同じようにシャベルとスコップという語を使っている例は次の例のみであった。同一作家が複数の作品で両方の語を用いる場合はなかった。

◎半年ほど勤めた大阪の建設会社を辞めて義父の組で土方をやりはじめた頃，文昭と一緒に彼は，スコップの柄で背中をぶったたかれたこともあった。[702]/だが，掘り起こした土は，黒々と湿っている。それを，シャベルですくいあげ，外に出す……安雄は，よいしょと声を掛けて土をシャベルで出しながら，「はい，はい」と調子よく相槌をうつ……つるはしを打ちつけた。見事に根元まで入った。引き起す。土はふくれあがり，めくれる。つるはしを置いて，シャベルに代えた。腰を入れ，シャベルのかどに足をかけ，土をすくった……つるはしをふるう。シャベルですくいあげる。[704]/安雄は，黙ってシャベルで土をすくっていた。[706]/ミキサーを使って，砂とバラスとセメントと水を入れ，コンクリをこねる時もある。ミキサーを運べない現場では，鉄板に，それらをのせ，スコップでこねる……土がめくれる。それは，つるはしを打ちつけて引いた力の分だけめくれあがるのだった。スコップですくう。それはスコップですくいあげる時の，腰の入れ方できまり，腕の力を入れた分だけ，スコップは土をすくいあげる。[710]（29中上健次「岬」）

シャベルとスコップは確かに同じ意味分野で用いられており，その混用は昭和40年代半ばから激しく，どちらがどちらと言えないような状況である。しかしながら，この混用は少なくとも現在に於て，個人のレベルでの混用ではなく，社会のレベルでの混用といえるのではないだろうか。すなわち，多くの場合，用具Aなるものを個人の言語の習得の過程でシャベルまたはスコップのどちらかを選択する。従って，どちらかを選択した場合片方は理解語彙

産されなくなったというような，時代の変化が関わるからであろう。石炭を大量にすくう道具は現在の社会ではほとんど見られなくなっているのが現状である。JIS 規格が改正されたのは昭和 61 年であるが，このような状況はもっと前からあったものと予想される。それが，シャベルとスコップの混用が激しくなった昭和 40 年代後半なのではなかろうか。つまり「もの」としてはなくなったが，「ことば」として残り，それが以前より見られた，この両語の混用に拍車をかけたと思われる。この混用はまた，シャベルの方もまた時代の要請で大小さまざまな商品が生産されるようになったため，ますます激しくなっていった。

ところで，園芸関係の資料では，何らかの意識を持つ場合，たとえば用具として正式に述べる，どちらかを別称として扱う（俗称と断ったり，かっこでくくったりする等）などの場合ではなくとも，同じ資料で無頓着にこの二語を同様に用いることもある。が，そのような例は案外少ない。

◎言葉をかへて云へば，ツルハシで掘るやうな處ならば浅くてもよいが，スコップで掘れるやうな所だと深く掘り取る必要がある [118] 植ゑる部分にシャベルで，深さ一尺徑一尺の穴を掘り，この中に次の肥料を施す [208]（昭 5 野崎信夫『住宅園芸』）

◎クワ，シャベルで耕します。……スコップで一度おこすと，約二〇センチの深さに耕されたことになりますから……[82] 土を入れるときに，上から入れるのと同時に，よこの壁もスコップを逆に使ってくずすようにして土入れします [129]（昭 36 川上幸男『日曜園芸』池田書店）

◎（ダリア球根ノ堀上ゲハ）移植鏝かシャベルで，球根にキズをつけないように，ていねいに堀り上げ，炎天で天日にさらさないようにします [172] 葉が霜で枯れたら……スコップを根元から 17～18 cm（球根の長い品種は 23～24 cm）はなれたところを，根元を中心として円形に 2～3 個所，縦に深くさしこみ，最後の 1 さしのときに，根元に足をかけ，スコップを横に倒し，株を土ごと持ち上げるようにして掘り上げます。スコップをあまり根元に近くさすと，球根を切ってしまいますから気をつけてください [179]（昭 42 合田弘一『わが家の花づくり』鶴書房）

◎スコップでていねいに耕して土中に混ぜ [164] 茎から 30 センチ以上離れたところにシャベルをさし，円形に切れ目を入れた後，土をゆるめながら静かに掘り起こします [189] シャベルで土をゆるめながら掘り上げます [192] 茎葉をつけたまま，シャベルで周りから掘り起こします [193] 深起こしする

○（ダリア球根ノ堀上ゲハ）移植鏝かシャベルで，球根にキズをつけないように，ていねいに堀り上げ，炎天で天日にさらさないようにします[172]（昭42資料21）
○折りたたみ式の小型シャベルは，野外の採集用あるいは車などに備えつけておくと応急の用に役立ちます[197]（昭43資料25）
○土を掘る道具　シャベル……普通大型のものが能率的ですが，婦人子どもには小型が軽くて使いやすいでしょう[207]（昭44資料28）
○ひとまわり小さい小型のシャベルのほうが，くたびれません[50]（昭44資料29）
○【園芸器具】①移植ゴテ……片手で扱うシャベルを小さくしたものだが，これだけで移植ばかりでなく，土をくだき，ならし，穴を掘り，浅く耕すなど，ひろく使える（昭44資料31）
○追い肥をやるとき，根元の土がかたまっている場合がある。このようなときは，シャベルなどを使って土をやわらかくしてやる[80]シャベルで押しつけて平らにならす[110]（昭54資料39）[9]
○（球根を上手に掘り上げるコツ）茎を地際で短く切り詰めたのち，小型のシャベルで根を傷めないように行います[71]（平4資料50）
○庭に大きなビニールをひろげ，その上に，腐葉土，油かすを置き，混ぜ合わせる……いすにすわって長い柄のシャベルを使う等[8]シャベルに一本の苗をすくうのはむずかしいので[9]（平5資料52）
○女は小さなシャベルを握ると庭の片隅に穴を堀りはじめた[974]（20吉行淳之介「紺色の実」）

これらは必ずしもイコール移植鏝ではない。大きさも普通のシャベルよりやや小さいものや移植鏝なみの小型のものなどさまざまであると思われる。今回触れることができなかったが，子供の玩具としてのものもこの類であろう。

従って，当然小型もまたシャベルとスコップの混用が予想されるのである。

4. む す び

今回の調査で両手で使う大型の道具としての，シャベルとスコップには古くから業界での区別があることがわかった。しかし，この業界でいうスコップについて記述している国語辞典は少ない。それはなぜか。それはJIS規格の改正版にあるように，かつては見られた機関車用のスコップがほとんど生

本文で移植鏝を明らかにスコップと呼んでいる例は園芸関係ではきわめて少ない。次の例のみである[8]。なお，資料51は園芸随筆で，資料52は児童教育を対象としたものであり，他の一般の園芸入門書の類とは性格を異にする。

• 鶏フンや落葉やらを埋め込んだ花壇の土にスコップで穴をあけ，球根の大きいのを選んで一箇ずつ植えていく[45]うっかりとユリの球根をスコップの先で切ってしまったりする[78]（平5資料51）

• スコップなどでコップに土を入れる[30]（平5資料52）

一方，小説ではいくつか用例を拾うことができる。

• 私もマリアンヌの墓へ草花を植えてしまおうとして立ち上りかけると，中年の外国婦人が扉を開けて，「すみませんが，スコップありませんか」と，慣れた日本語を使う。M氏から小さなスコップを借りて，こつこつと下の方の小径へその婦人は下りていった。[46]（19中里恒子「墓地の春」）

• 珍しくおもての庭でとも子の父親が庭いじりをしていた。「やあ」と言って立上ると，手にしていたスコップを捨て急いで縁側から僕を招いて[570]（10宇野千代「色ざんげ」）

• 彼がカンゾウをほしがっていたので，駅の近くの婦人服の仕立てをしている店へ行った帰りに，二人で掘って来たのであった……二人は，さげ袋から濡れた新聞紙にくるんだカンゾウとスコップを取り出すと「どこへ植えますか」と彼に聞いた。[320]「カンゾウは掘りにくかったか」「いいえ。二人でスコップをひとつずつ持って掘ったの」「川岸で，から傘さして」[320]（21庄野潤三「絵合わせ」）

• う，う，と小さなうめき声をあげて，誰かが，小さなスコップで落葉をかきわけ，地面を掘っていた。相手が子供らしいことに気付いて，警戒をとき，青木がそばに寄っていった[553]（24高橋和巳「堕落」）

移植鏝（又はそれに近いもの）をスコップと呼ぶ傾向は一般社会にはあるものの，園芸用具として呼ぶにはまだ抵抗があるのだろうか。移植鏝にも様々な形，例えば幅の広いものや狭いもの，ヘラ状のものやさじ状のものがあって，それらをすべてスコップと呼ぶには抵抗があるのかもしれない。また，特に園芸資料では大型をスコップと呼ぶ場合が多いので，そちらとの混乱を避ける傾向があるのかもしれない。いずれにしても，前回予想したような移植鏝をスコップと呼ぶことが，現在の混用状況を引き出したとは必ずしも言えないようだ。

ところで，シャベルに関しても小型のものをさす場合がある。

• 節夫は……あらためてスコップを持ち出し，土きれ一つすくっては荒い息を吐きつつ穴を掘る……ようやく暮れつかた，人一人がどうにか横たわる深さ幅に仕上げると [891]（26 野坂昭如「骨餓身峠死人葛」）

以上用具 A の呼称を考察してきたが，結論としてはその役割を分類して用例にあったても，シャベルとスコップの二語にはほとんど違いがないということになる。

3.3 片手を使って苗などを植えたりする用具 (B) の呼称

表①に示した通り，園芸関係の資料で用具 B の呼称はすべて「移植鏝（ごて）」である。一部の企業では「移植鏝」をスコップと呼んでいたり，最近の国語辞典の記述にも，スコップの説明に「移植鏝」とある場合もあることから考えれば意外であった。その中で次のような例を偶然発見した。資料 45 には芝生の手入れに用いる道具として次のような説明がある。

• スコップ――寒肥を与えたり，移植，土つくりなどに必要です。丸形の先の尖っているもの（剣スコ）と角型（角スコ）の二種類揃えましょう。[267]（昭 61 資料 45）

このスコップは記述の内容から考えれば明らかに大型のものと思われる。ところが，絵図では，小型の移植鏝のようなものがスコップと説明されている。これは絵図の誤りなのであろうが，小型の移植鏝をスコップとも呼ぶ一例とみなすことができよう。

さて，用具名としては先述したように正式名あるいは一般的名称を用いる傾向を使う傾向があるので，本文の用例に当ってみることにする。が，ここでも案外用例は少ない。

まず，B をスコップとは呼んではいないものの，その可能性を示唆するような例をあげてみる。

•（盆栽用トシテハ）形状は草花の移植鏝のやうな，スコップ状ではなく，寧ろ裁縫用の火熨斗鏝に似たものであります [57]（昭 5 資料 3）

• 移植ゴテ――柄が木製のものと，柄と本体が金属製で一体となったものがあります。形は幅の広いもの，細いもの，スコップ型など，よく見るといろいろあります [110]（昭 61 資料 45）

ともに「スコップ状」「スコップ型」いうのは，大小というより「匙状」「匙型」という程度の意味であろう。ただ，このような使い方と移植鏝をスコップと呼ぶに至ったことは大いに関連があると思われる。

も入れ[116]（大15資料1）

• 堆肥・腐葉・元肥にする遅効性肥料の混合物を，一穴にスコップ山盛り一杯くらいを投入して，底土とよくまぜます[36]（昭42資料23）

• 腐葉土スコップ一～二はい，油粕，配合肥料はふたつみていどの量で十分です[82]（昭44資料27）

• 腐葉土を買ってきて，一平方メートルあたり，スコップ五杯ほどすき込めば充分[122]（昭52資料37）

• よく腐っているたい肥があれば，スコップ一杯をばらまいて混ぜるとなおよいのです[328]（昭52資料38）

• スコップ――寒肥を与えたり，移植，土つくりなどに必要です，丸形で先の尖っているもの（剣スコ）と角型（角スコ）の二種類揃えましょう[267]（昭61資料45）（土などをかきまぜる）

• スコップで用土をときどきかきまぜる[94]（昭54資料40）

• 鉄板を燃やし場にかけて腐葉土を水に入れ，焦げないように，スコップでかき混ぜながら蒸す[15]（平5資料52）

小説からの用例は次の通り。

○一人の痩せた老人がそこだけまだ一面に残っている雪をシャベルかなんかで掻き寄せてい[486]（6堀辰雄「大和路・信濃路」）

• 「お父ちゃんはね，こういう風にしてスコップを泥に突っこんで，それからこういう風にして，その泥を道の上に運んだんだ」[699]（17木山捷平「大陸の細道」）

○数人の筋骨逞しい男たちが汗まみれの裸の上半身をてらてら炎にあぶりだされながら，シャベルで石炭を掬って火口に投げ入れていました。[426]（19大原富枝「ストマイつんぼ」）

○それから彼は一旦梯子を下りて来ると，ショベルを用意して，かやに尻を押させ，押入の中から天井裏へよじ上った……彼は，其処で使うには大きすぎるショベルを，窮屈な姿勢で使いながら，雪すくいにかかった。[849]（21阿川弘之「舷灯」）

• （くずれた焼死体を見て）ウッと口を押さえとびすさった警防団，ややしばし後に「しゃアないわ，スコップですくお」と，そのスコップの動きにつれて，指の一本一本の肉までがきれいにはがれ，くだけ，最後はこれもオブラートの如くたわいない寝巻きとごちゃまぜにむしろの担架につみ上げられたのだった。[795]（26野坂昭如「エロ事師たち」）

ルハシも役に立たず，死者たちを埋葬することは不可能だ。[698]（26 五木寛之「蒼ざめた馬を見よ」）

• スコップの先は，穴を掘るための，普通より細長いものである。それを，朝乃さんはかかげて，左右に振っている。手を振る代りにそれを振っている。大きな拒絶のつもりだ……しかし男には，朝乃さんが振りまわすスコップは見えても，朝乃さんの，うめき声のような息の音も，スコップの先が空を切る音も聴えない。[690]（29 富岡多恵子「遠い空」）

○勲平はシャベルで穴を掘った [265]（30 高橋たか子「天の湖」）

○実際，この浅間山麓では，地面を一メートルの深さに掘るのは容易なことではなかった。拳大のものなどは小さい方で，メシモリ女の墓石くらいのものがごろごろ出て来る。私の山小屋の庭でもそうだった。シャベルがまともには突き立たないのである。シャベルの先が焼石と衝突して音をたてた。[543]（30 後藤明生「吉野大夫」）

なお，一つだけシャベルに片寄りが見られる場合があった。これはシャベル本来の役割ではないが，「人・動物などをたたく」場合である。用例が少ないので偶然かもしれないが……。

○（ネズミの子を）シャベルで叩いて捕まえて摑まえてみようかと [53]（平 5 資料 51）

○鶴嘴やシャベルで敵と戦えない [922]（13 中山義秀「テニヤンの末日」）

○彼が振り返ると，彼女の良人がすぐうしろで，石灰の掻き出しに使う大きなショベルを振り上げていた/彼は奪い取ったショベルで仰向けに倒れている相手を殴りつけていた [以上 239]（18 山本周五郎「青べか物語」）

○「それはそうだけれど，シャベルでやっつけているときは夢中よ」/うらのマダムも大きなシャベルを片手に「ヨカッタテスネ」とニコニコ笑っている。/で，家内が偶然発見してシャベルで（モグラを）叩きふせた次第を話してきかせると [以上 707]（20 安岡章太郎「もぐらの手袋」）

【土などをすくう】

園芸資料は第一例をのぞきスコップに片寄った。「すくう」場合はスコップという意識あっての用例かもしれない。視点は異なるが「すくう」と同じく匙的な用法「かきまぜる」も参考までに示した。用例は少ないがやはりスコップである。但し，小説では「すくう」場合も片寄りがあるとはいえない。

○家庭等では花壇を平らにならし整地し一坪につき堆肥をシャベルに七八杯

• そして分隊長自らスコップを掘り，穴掘りにとりかかった。[703]（14 木山捷平「大陸の細道」）

○尾崎さんがシャベルで（ツゲの）木を掘ってくれた[759]（14 木山捷平「茶の木」）

• 「明日はまだ竈を掘るだけですからスコップ一つで結構です」[877] またスコップで土掘り作業に取りかかる。[878]（14 檀一雄「リツ子・その愛」）

• そしてスコップと鍬の所在を聞くと黙って外へ出て行った。私は，彼が玄関のわきで芭蕉を掘り起こし[492]（17 藤枝静男「空気頭」）

○この手でシャベルを握ることもできなかった。[734]（18 松本清張「石の骨」）

○あくる朝，良一は木崎とシャベルを買いに行くといった……帰ってくるとベランダの下の傾斜地を二人で掘っては土を運びだした。[87]（21 小島信夫「抱擁家族」）

• ミノーがスコップを持って雪の積もった地面を掘り起し[395]（21 庄野潤三「ガンビア滞在記」）

• 最初の仕事は，身の必要のために，穴を掘ることだった……「スコップを持ってきてくれないか」と，その朝，まだ湯気の立つ箸をつけた時，私はふいにそのことを思い立って，こっそり出て行きかけた佐枝を大きな声で呼び止めた[906]（23 古井由吉「聖」）

• 僕は元の穀物庫から，昨日女子学生が寐藁を運ぶのに使った小さな運搬車や，錆びたスコップを探しだした。だが墓穴を掘るのもひと苦労だ。馬の体を入れるには相当大きな穴が必要だし，なるべく深く埋めたい。僕はスコップを使って掘り出したが，表面柔らかそうな土にみえても下の方は溶岩塊などが混って硬い。[832]（24 田久保英夫「深い河」）

○台所のごみを捨てる穴の横にシャベルで浅い窪みを作った。[1095]（24 黒井千次「春の道標」）

○三人ばかりの男たちが，シャベルやツルハシで，庭木も庭石もかまわず辺りを掘り起しているところだった。[885]（25 有吉佐和子「三婆」）

• 記事によると，発掘は豪雨の中でおこなわれ，地元の人が協力したという。菊川の記憶をたよりにスコップが突き立てられ，かなりの時間を要して遺骨を掘り当て柩に納め，改葬後，墓標を立てた。[164]（26 吉村昭「月下美人」）

• 各小隊は，円匙（スコップ）を使って，幅二メートル，長さ五メートル，深さ二・五メートルの雪壕を掘った。[602]（26 新田次郎「八甲田山死の彷徨」）

• 零下数十度の寒気に，大地は鋼鉄のように凍てついていた。スコップもツ

○小樹に於いては直接鍬やショベルを以って割合簡単に堀起すことが出来[211]（昭24資料7）

○植えつけ地がきまったら，クワかショベルで深く掘り起こして土を砕きます[204]（昭33資料9）

○シャベルは土を掘るだけの道具で，根を切るには根切りをつかいます[208]（昭34資料10）

○この土を掘り起すときには，くわやシャベルを使い[535]（昭38資料18）

○シャベルやすきで球根を傷つけぬように注意して掘りあげたら[198]（昭39資料19）

•（幹ノ周囲ニ描イタ）線の所をスコップで垂直に掘り[75]（昭44資料27）

○シャベルで掘りおこしながら，土をよくまぜ合わせてならします[197]（昭44資料28）

○シャベルで掘り起こし肥料と土をまぜる[44]（昭44資料29）

○深いほどよいのですが，一応一メートルは掘りましょう。これには細身のシャベルが向いています[207]（昭50資料36）

•生育中に移植する場合はスコップで大きく起こし，根を傷めないように下部の土を落とし，浅く植えます[226]（昭55資料41）

•実付きのわるい時は根元を3月頃にスコップで掘るとよい[35]（昭56資料42）

○（ヤマユリノ根ッコニツイテ）「ハハハ，そうねェ，まず移植ゴテなんかじゃ掘れないだろうなァ。シャベルでも持ってうんしょ，うんしょと掘らないとねェ……」[96]（昭62資料46）

•株の回りにスコップを入れて丸く穴を掘り，腐葉土をすき込んでやる[90]（平1資料47）

•株分けの方法は，強健で生育旺盛な株を選び，スコップやクワで堀り上げ[107]（平4資料48）

以下は，小説資料からの用例である。

○鍬やシャベルを持ち出して，萩や芙蓉の植え替えをしたり[649]（4徳田秋声「仮装人物」）

○「君は止め給え，君のような身体でシャベルを使うのは無理だ。僕が掘ってやろう」[736]（4高浜虚子「寿福寺」）

○シャベルで（萩の）根をおこしたとき，一緒に根をつけてきたらしい野草が[408]（8宮本百合子「杉垣」）

• スコップでひとほりすると水がにじんでくるようなところは避けるか，あるいは次のように改良してやらなければなりません[148]（昭和36・資料14）
• 幹の直径2.5～3.0倍の大きさに幹を中心に円を描き，それにしたがってスコップでほりとっていくわけです[154]（昭44資料26）

そしてその後，表①によれば，昭和40年半ば位からAをスコップという呼び方で一般に呼ぶことが多くなり，シャベルと並ぶようになって現在に至っている。用例を示すが，先のシャベルとその説明内容は変わらない。

• スコップ，クワ　土を掘りおこして新しく花壇をつくるにはスコップが必要です[723]（昭42資料20）
• 〔スコップ〕　土を掘る。深く掘るとき，土や砂が移動するとき，側溝の掃除用など，使用範囲が広く，絶対に必要です[36]（昭45資料33）
• スコップ　穴掘り，土起こし，地ならし，土運び，肥料のすき込みなど，いろいろな仕事に使う。先の丸いのが一般的で，家庭用には中型のものが使いやすい。……角型スコップは，土や肥料の運搬，整理などにのみ使われる[406]（昭46資料35）
• スコップ――寒肥を与えたり，移植，土つくりなどに必要です，丸形で先の尖っているもの（剣スコ）と角型（角スコ）の二種類揃えましょう[267]（昭61資料45）

次に本文の用例から混用の実態について考えてみることにする。全くの混用なのか，それとも，何らかの区別が存在するのか。そこで，先に述べたようなシャベルの主要な役割である「土などを掘る」という点と，スコップの主要な役割である「すくう」という点に注目して用例にあたってみた。

【土を掘る】

園芸資料では先の用具説明と同じく，スコップが目だってくるのは昭和40年代半ばからではあるが，シャベルとスコップの違いはないといってよい。小説からの用例も同様である。すなわち，「土を掘る」場合は特にシャベルの方を用いるという傾向は見受けられない。同様に足をかけて「土を耕す」，その刃を利用して「根などを切る」「土などに突き立てる」場合も，業界等の区別からいえばシャベル的であるわけだが，これも例はあげないが園芸資料でも小説でも双方同様に用いられている。

○鍬かシャベルで出来るだけ深く掘り起し，土塊を砕いて地ならしをする[7]（昭21資料5）

用例は●，両方の用例は◎をその頭に付した。また，〔　〕の数字はページ数，資料番号は，注(5)に示したものを表す。なお，下線は引用者。）

○シャベル　土を掘ったり，土をすくうのに便利で丸刃の丈夫な品が使いやすいのです[261]（昭35資料11）

○シャベル　土の掘りおこし，植え込みに使う[219]（昭36資料14）

◎シャベル　俗にスコップといって土の掘取りや穴堀り，庭木の移植などに必要な器具です。丸刃の丈夫な品が便利でしょう[163]（昭38資料17）

○花壇のほりおこし，庭木などの植え穴をほる，かきねをつくる，砂やじゃりをはこぶ，そしてどぶさらえまでできるのがこのシャベルです……また，丸シャベルと角シャベルとがありますが一般には丸シャベルがよいでしょう[197]（昭43資料25）

○シャベル　くわよりもほしい道具です。花壇のほりおこし，庭木の植えかえ，かきねづくりの穴ほり，苗の植えつけ，宿根草の株わけ，花木の植えつけ，土砂を運ぶ場合など，ほとんど万能に近いくらいのつかい道があります[33]（昭44資料26）

○シャベル　おもに土を耕すのに用いる。土を起こすばあいに，シャベルで堀り返していくほうが，鍬よりも深く耕すことができ，力もあまりいらない。……家庭園芸では，先の尖っている中型のもののほうが使いやすい[112]（昭44資料30）

○庭で起こすとか，穴を掘る，あるいは用土を混ぜ合わせるなど，家庭園芸でまず必要な道具としては，シャベルとクワ，それにフルイがあります。[44]（昭45資料32）

資料17に注意したい。シャベルを「俗にスコップといって」とある[7]。また，表中の注にも示したように，用具としてシャベルと説明しているのにもかかわらず，図の中では「剣先スコップ」と記しているものが，この約10年間に3つの書物に見られる。この「剣先スコップ」については，先述した通り，浅香工業の方から地方によっては丸型ショベルをこのように呼ぶことがあるとのご指摘を賜った。これらのことから考えると，この昭和30年代半ばから昭和40年代半ば位までは，スコップは俗語（あるいは方言的な語）としての意識が一般にあったのではないかと思われる。（シャベルに比べ，外来語の用例としてなかなか表面的に出てこなかったのはこのためではないか。）

従って，用具名としてはシャベルと言いながら，本文でスコップを使うこともある。

《表①》 続き

	A の呼称	B の呼称
39 図解草花園芸の事典（昭 53）	シャベル	＊移植ごて ＊本文ではシャベルとも
40 図解樹木園芸の事典（昭 54）	スコップ	移植ごて
☆ 四季の園芸ガイド　基礎から応用まで（昭 60）	スコップ	移植ごて
☆ 朝日園芸百科 10（昭 60）	スコップ	移植ごて
45 常識破りの園芸法（昭 61）	＊スコップ	移植ゴテ ＊絵はなぜか小型
☆ 園芸大百科事典（昭 61）	シャベル	移植ごて
☆大平農園の野菜づくり（平 4）	シャベル	移植ごて

＊ 左端の番号は資料番号。番号のない☆印のものは以下の通り。
『花の作り方―鉢物から花壇まで』（昭 41） 野崎信夫著・池田書店 / 『日曜園芸 12 ケ月』（昭 42） 主婦と生活社 / 『日曜園芸ハンドブック』（昭 43） 川上幸男著・池田書店 / 『家庭園芸―花づくり庭づくり小百科』（昭 44） 吉村巌著・鶴書房 / 『四季の家庭園芸』（昭 44） 川上幸男著・有紀書房 / 『草花・果樹・野菜の家庭園芸』（昭 44） 金崎一夫他著・文研出版 / 『趣味の家庭園芸』（昭 53） 塚本洋太郎監修・趣味と生活社 / 『四季の園芸ガイド　基礎から応用まで』（昭 60） 園芸文化協会監修・ぎょうせい / 『朝日園芸百科 10』（昭 60） 朝日新聞社 / 『園芸大百科事典』（昭 61） 講談社 / 『大平農園の野菜づくり』（平 4） 大平博四著・学習研究社 /

シャベル，スコップについて，浅香工業の起業時の区別，大正から昭和にかけてのプロレタリア文学作品での区別，そして JIS 規格による業界での区別をまとめれば，「主に穴を掘るのに使用する足踏みのついたもの」がシャベル（ショベル），「主に石炭などをすくうための足踏みのないなで肩のもの」がスコップということだった。これによれば A はシャベル（以下，ショベル・ショウベルもこれに含めていう）と呼ぶべきであろうが，ここではシャベルのみならず，スコップという呼び方も多い。また，B については業界では一部スコップと呼び，国語辞典の「スコップ」の記述にも「移植鏝」とあるにもかかわらず，園芸用具としてはすべて「移植鏝」という呼称を用いている。

3.2 両手を使って土などを掘る園芸用具（A）の呼称

まず A について考察する。

表①によれば，A について明らかにある傾向が存在する。昭和 30 年代半ばから昭和 40 年代半ばまでは用具としての A はシャベルと呼ぶのが一般的であった。（以下用例を示す場合，見やすくするためにシャベルの用例は○，スコップの

《表①》

	A の呼称	B の呼称	
2 住宅園芸（昭 5）	＊ショベル	移植鏝	＊本文ではシャベル，スコップ
4 空地利用野菜の作り方（昭 16）	＊ショウベル	移植鏝	＊俗にシャベルとあり
6 新鮮野菜（昭 22）	＊スコップ	移植鏝	＊（シャベル）とあり
9 花の作り方（昭 33）	ショベル	移植ゴテ	
11 四季の花作り（昭 35）	シャベル	移植鏝	＊図の中では「剣先スコップ」
13 日曜園芸（昭 36）	＊シャベル	移植ゴテ	＊本文ではシャベル，スコップ
14 生活を明るくする家庭園芸（昭 36）	＊シャベル	移植ごて	＊本文ではスコップ
17 四季の家庭園芸（昭 38）	＊シャベル	移植ごて	＊俗にスコップとあり
18 園芸全書（昭 38）	シャベル	移植ごて	
16 花作りを始める人のために（昭 38）	シャベル	移植ごて	
☆ 花の作り方（昭 41）	＊シャベル	移植鏝	＊図の中では「剣先スコップ」
20 ホームコンサルタント家庭の園芸（昭 42）	＊スコップ	移植ゴテ	＊本文ではシャベル
☆ 日曜園芸 12 ケ月（昭 42）	シャベル	移植用鏝	
22 わが家の園芸（昭 42）	シャベル	移植ゴテ	
24 日曜花作りハンドブック（昭 43）	＊シャベル	移植コテ	＊図の中では「剣先スコップ」
25 趣味の草花園芸（昭 43）	シャベル	移植ごて	
☆ 日曜園芸ハンドブック（昭 43）	＊丸(角)シャベル	移植ごて	＊本文ではシャベル，スコップ
☆ 家庭園芸（昭 44）	シャベル	移植ごて	
28 花物園芸入門（昭 44）	シャベル	移植ゴテ	
29 マイホーム園芸（昭 44）	シャベル	移植ゴテ	
30 花づくり全科（昭 44）	シャベル	移植ごて	
31 家庭園芸（昭 44）	シャベル	移植ゴテ	
☆ 四季の家庭園芸（昭 44）	＊シャベル	移植ゴテ	＊本文ではスコップ
☆ 草花•果樹•野菜の家庭園芸（昭 44）	スコップ	移植ゴテ	
32 四季の花壇づくり（昭 45）	＊シャベル	移植ごて	＊本文ではシャベル，スコップ
34 趣味の花つくり（昭 45）	シャベル	移植ごて	
20 四季の花壇づくり（昭 45）	シャベル	移植ゴテ	
33 家庭園芸（昭 45）	スコップ	移植ゴテ	
35 家庭園芸全書（昭 46）	スコップ	移植ゴテ	
38 北海道の庭づくり花づくり（昭 52）	＊ショベル		＊(スコップ)とあり
☆ 趣味の家庭園芸（昭 53）	スコップ	移植ごて	

記述の仕方と，シャベルの特殊なものという記述の仕方があった。後者では「小型」という記述が7種（さらに外来語辞典3種も加えられる）もあった。大型のスコップについては，現代ではほとんど記述されていないといってもよい。これは，一般社会では，石炭などを掬う，足踏みのないなで肩の大きなスコップを見かけることが稀になったことと関連するのであろう。代わりに，「移植鏝」と呼ばれていたものが，その形の変遷を通して，園芸ブームに乗じていつのまにかスコップと呼ばれるようになったのだろうか。が，混用の歴史は必ずしも単純ではない。

3. シャベルとスコップ　混用の昭和史

3.1 用具名として呼称

外来語として，早い用例はそれぞれ明治期より見られるが，この両者が対等に使用されるに至ったのは，やはり国語辞書にスコップが掲載されるようになった昭和10年前後といってよい[4]。

従って，文献のレベルでは昭和期の資料をあたることによって，この混用の歴史を知ることができるのではないかと考える。今回特に，土砂等を掘ったりすくったりする道具として大型も小型も使う園芸関係の資料[5]を対象に，この2語の使用状況を探ってみた。土木関係の資料等をも見るべきであろうが，日常生活において身近な園芸用具としてのシャベルとスコップを調査することによって，一般社会における両者の混用をある程度把握できるものと考えるからである。なお，資料面の片寄りを，昭和期の小説[6]の用例によってある程度補うことにする。

さて，園芸関係の書物の中では用具を説明する場合が多い。用具としての名称は本文で用いる場合と異なり，いかに混用が激しかろうとも，正式な名称またはより一般的な名称を使用する傾向があるのではないか。そこで，「両手を使って土などを掘る大型の用具」（仮にAとする）と「片手を使って苗などを植える小型の用具」（仮にBとする）について，その名称を示したのが次の表①である。説明とともに図（または写真）を付している場合が多いが，それらがない場合は説明文からABを判断した。

コンクリートショベル……ネリスコ，ネリショベル

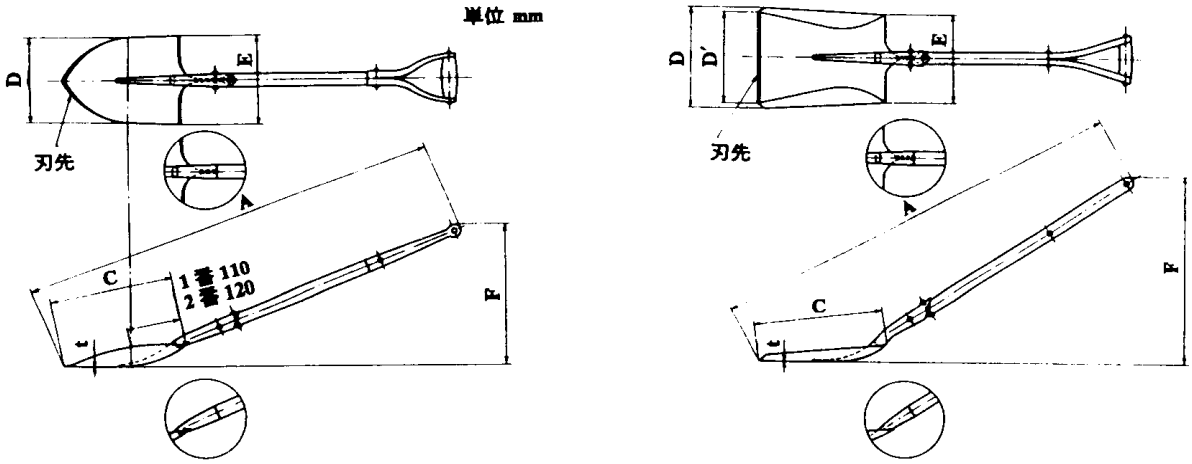
スコップ……炭スコ，大角

このことから，業界では公式にはJIS規格の呼称によるものの，一般には両者の混同が起こっていることが想像できる。もし，全くJIS規格通りだとすれば，浅香工業(株)から指摘があったように，あえて大小を問うならば，大なるものはショベルよりむしろスコップである。だが，実際は「大型商品をショベル，中型商品をホームショベル，小型商品を移植鏝・スコップと表示」(キンボシ(株))している場合や，ショベルを「土木作業等で使う大きな方の総称」((株)福井)として用いる場合もあるのである。

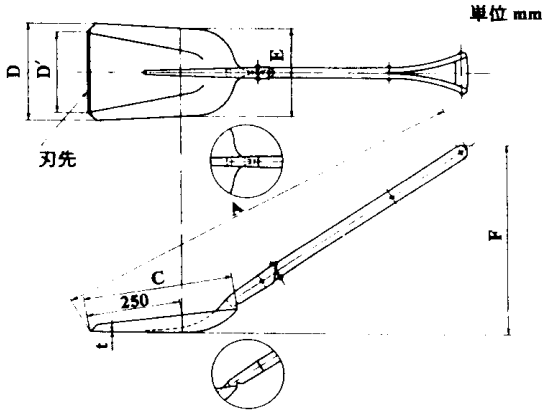
なお，JIS規格でいうショベルおよびスコップはすべて大型ものであり，移植鏝のような小型のものについては述べてはいない。園芸用の小型の類を製造している各社の回答によれば，その呼称は「移植鏝」が大半である。そして，その幅の広いものを「移植鏝(大)」「移植鏝(太)」，その幅が狭いものを「移植鏝(小)」「移植鏝(細)」と分けている場合があるが，特に前者をスコップ，後者を移植鏝と呼ぶ((株)サボテン)場合もある。

ところで，この業界ではJIS規格通り，ショベルと呼ぶのが一般的のようだが，JIS規格制定以前ではどうだったのか。その点について，浅香工業(株)から呼称の変遷についてうかがうことができた。浅香工業(株)は，寛文年間の刃物問屋の流れを汲んで，明治26年に起業，日本で初めてショベル・スコップを製造した。総務部の藤田敏雄氏によれば「明治26年から大正3年迄はシャブル・スコップと呼ばれており(一部ショブルと呼ばれていた形跡あり。発音の違いではないかと推測される)以後，昭和6年当社の定款ではシャベル・スコップと呼称変更され」「昭和29年JIS制定を機にショベルに統一され現在に至」ると，ご教示いただいた。昭和6年の「シャブル」から「シャベル」への呼称変更について特に述べておられないが，おそらく当時の一般的呼称によったのではないだろうか。そして，少なくともJIS規格制定まではこの一般的呼称であるシャベルが用いられていたわけである。

さてここで，改めて現代の国語辞典におけるシャベルとスコップについて振り返ってみることにしよう。シャベルについては17種の国語辞典で概ね記述は一致していた。すなわち「土・砂・石炭・雪などをすくったり，穴を掘ったりする道具」である。ここには，業界でいうショベルの「足踏み」について述べたものはない。一般社会ではこの「足踏み」は両者の区別のポイントにはならないのだろうか。スコップについては，全くシャベルと同じという



図① 「日本工業規格　ショベル及びスコップ」（昭 63. 1）よりそのまま転載



図② 「日本工業規格　ショベル及びスコップ」（昭 63. 1）よりそのまま転載

規格書にあるものをそのまま書き写す。これらの種類については昭和 29 年のものが昭和 61 年に改正されている。すなわち，「需要の動向と生産の現状から」，ショベルについてはやや小型のものが追加される一方，「スコップ機関車用甲および乙」が「ほとんど生産されなくなった」ため削除された。このあたりの事情は一般社会での両語使用の変遷と関わり合う点もあろう。

この図や寸法から，ショベルとスコップの大きな違いは，大小ではなく，各社からご指摘をいただいたように，「足踏みの付いているもの」をショベル，「足踏みのないなで肩のもの」をスコップと呼んでいることがわかる。但し，浅香工業から，地方によって次のように呼ぶ場合があることをご教示いただいた。

ショベル丸型……丸スコ，剣先，剣スコ

ショベル角型……角スコ，小角

シャベルとスコップの区別

		一般の称呼	特　徴
総称—シャベル	土工用シャベル	丸型シャベル 角型シャベル コンクリート用シャベル	①足を踏みかけ易い様に刃先の丸形角型如何に拘らず頭の上部（肩と称す）が水平である。 ②適当の深さを有し堀り且つ掬うに用いられる。
	石炭用スコップ	石炭用スコップ 火夫用シャベル (国鉄汽船会社の一部称呼)	①刃先は全て一文字であり肩は土工用の様に水平でなく丸型である。 ②土工用に比して大型で深く，石炭，鉱石等粗いものを掬うに用いられる。

（「象印シャベル・スコップ型録 1952」（浅香工業株式会社）より）

と区別していた。

(2) これらはそれぞれの使用場所によってさまざまな呼称があった。

(3) 堀り掬う道具の総称としては，シャベルを使用していた。

(4) シャベルは「肩」が水平であるのに対して，スコップは「肩」が丸形である。これは，シャベルが足を掛けて用いるためである。

(5) 両者の違いについて，スコップは「土工用に比して大型で深く」とある。

(1) (2) から，昭和 27 年当時，製造会社においての区別は存在していたものの，一部社会ではこの区別に反する使用法がすでに定着しており，両者の混用状況があったことがわかる。また，(3) から，スコップよりシャベルの方が一般的な語であったとして判断してよいと思われる。(4) は前号でふれたものの，国語辞典にはない記述であった。そして，(5) は現代の国語辞典の記述（スコップはシャベルに比較して小なる記述が多かった）とむしろ逆になる。

そして，昭和 29 年に JIS 規格が制定された。（昭和 63 年の改正版[3]によれば）まず，JIS 規格における「ショベル及びスコップ」の呼称の適用範囲は「土木用，農事用及び家庭用」とある。ショベルには「丸形 1 番」（全長 915 mm 肩幅 202 mm）「丸形 2 番」（全長 970 mm 肩幅 232 mm）「角形 1 番」（全長 915 mm 肩幅 190 mm）「角形 2 番」（全長 970 mm 肩幅 230 mm）「園芸用丸形」（全長 815 mm 肩幅 167 mm）「園芸用角型」（全長 815 mm 肩幅 167 mm）「コンクリート用」（全長 910 mm 肩幅 170 mm）があり，スコップについては「2 番」（全長 1050 mm 肩幅 240 mm）「3 番」（全長 1080 mm 肩幅 255 mm）がある。寸法については多少の許容差が認められている。ショベル 2 点を図①にスコップ 1 点を図②に

浅香工業株式会社（堺市海山町2丁目117番地）
キンボシ株式会社（小野市本町10番地）
株式会社サボテン（三木市別所町巴40番地）
株式会社安田工場（江戸川区中央3-9-2）
株式会社福井（堺市九間町東1-1-10）

その製造の歴史や用語の違い等かなり詳しい点までご教示いただいた会社もある。製造カタログやJIS規格の書類等貴重な参考資料もお寄せいただいた。本稿が成ったのはこのご協力あってこそである。心より感謝申し上げる。

2. シャベルとスコップの混用の歴史について

前号において，シャベルは英語起源，スコップはオランダ語起源の外来語であり，その正確な流入時期は不明のままだが，幕末の英和辞典・蘭和辞典に掲載されていることから，幕末には原語が入っきていたことを確認した[2)]。そして，少なくともこの時点で両語には大きな違いはなかったものと想像する。

また，外来語として日本語の文献に登場するのは，前回の調査段階ではシャベルは明治期，スコップは大正期であった。ところが，1で述べたように明治26年起業時に浅香工業は，すでに「シヤブル」「スコツプ」という語を使用していた。その違いについて，浅香工業総務部の藤田敏雄氏によれば，「主に穴を掘る用途に使用する足踏みのついた先のとがったものをシャブルと呼び，主にすくう事を用途として使用するなで肩で先端部が直線となっているものをスコップと呼んだ」ことはわかっていても，この由来については，当時の人間及び資料が残っていないので不明であるとのことだ。

また，前回の調査で，大正から昭和にかけてのプロレタリア文学の作品の用例によって，シャベルは「土砂などを堀り又は掬うために工事現場等で人夫が用いる」道具であり，スコップは「石炭類を掬うために工場等で火夫がもちいる」道具という使い分けがあることがわかった。この使い分けは浅香工業の明治期における違いとほぼ一致している。さらに，時代は下って，浅香工業の昭和27（1952）年のカタログにみえる両者の区別を次の表に示す。（なお，原文の旧字を新字に改めてある。）

この表は，この2語の違いについて様々な点を物語っている。今それらを箇条書きに整理してみる。

(1) 業界では（あるいは専門的には）「土工用」のシャベルと「石炭用」スコップ

類義語の混乱——「シャベル」と「スコップ」の昭和史——

染 谷 裕 子

1. はじめに

本誌前号で，外来語同士の類義語「シャベル」および「スコップ」(穴を掘ったり，土砂などをすくったりする道具) について，その語源，簡単な語史，辞書における記述の違い等を述べたうえで，現在混用状況にあることを指摘した。が，不備な点も多く，いくつかの問題点を指摘したままになっていた。今回，その後の調査によって，この問題点のいくつかについて解決を試みる次第である。その問題点について整理してみる。

(1) シャベルとスコップがいつ外来語として日本語に定着したか。

(2) シャベルとスコップの使い分けに関して記述してある資料が国語辞書以外にないか。

(3) シャベルとスコップの混用の状況が激しくなったのはいつか。また，その原因は何か。

(1) に関しては残念ながら未解決のままである。ただ，前回の資料では大正期までその用例を見いだせなかったスコップであるが，今回後に述べるように，企業のご協力をいただき，シャベルを日本で初めて生産した，浅香工業株式会社のご教示によって，明治 26 年の起業時には「シヤブル」「スコツプ」という語を使用していたことがわかった[1)]。

(2) については，これらの道具を製造している業界の呼び分けを調査してみた。これを，国語辞書等の記述と比較してみることにする。

(3) については，少なくともこの 2 語が完全に定着した昭和期の，特に園芸関係の資料を中心に探ってみた。

従って，本稿の主なる目的は上記の (2) 及び (3) の問題点を解決を試みることである。

なお，先述したように，今回はシャベル・スコップを製造 (または販売) している，次の会社 5 社の協力を得ることができた。